

グアムを訪れて感じた心地よさ

浅野 健

昨年の春にグアムに出かけた。国内のまちと比べると、道はガタガタ、アップダウンが大きいなど、まちはバリアだらけである。でも何か心地がいいのだ。そんなグアムの様子をここで紹介する。



タモン地区で過ごした。ここは、主要なホテル群が集積するリゾート地区である。観光客の多くは、ここから周辺の自然、ダイビングスポット、ビーチに出かける。

タモン地区では、歩道の舗装や横断歩道の舗装は主にインターロックングブロックが使われている。これらの舗装は周辺のカラフルな建物や青い空とそれなりにマッチしているのだが、よく見てみると、自動車の往来が多い横断歩道のインターロックングブロック舗装は沈下していたり、ブロックが所々割れたりしている。また、歩道もあまり補修されないためか、全体にガタガタである。グアムでは、建築・土木資材をはじめ多くの物資は遠くのアメリカ本土でなく近い日本などからの輸入に頼っているそう、物資を注文してからグアム島に届くのに大変長い時間がかかるためか、工事がなかなか行われないようである(たまたま聴いた地元の日本人向けラジオ放送の話による)。全体にアップダウンが大きく、まだ歩くのがおぼつかない子どもを連れての移動は大変だった。さらに、歩行者用信号もすぐに青から赤に変わってしまったため、走って道路を渡らなければならない、といった有様だった。

バリアを感じさせない心地よさ

グアムに滞在したのは4日間であったが、当初感じていたこのようなバリアはすぐに解消された。観光客を相手にしているレストランやショップの店員はもちろん、道行く人まで対応がとてもよいのである。ベビーカーを引いて困ってい

る人がいればすぐに手を差し伸べてくれるし、車のドライバーは歩行者信号が変わっても歩行者の横断を待っていてくれる。歩行者の横断を待つために車の列ができていても、クラクションを聞くことはほとんどなかった。グアムには、ハード的には多少問題があってもそれを感じさせない、心地よさがあった。

日本ではハード面ではバリアフリー化が進んでいるが...

一方、日本では、昨年にバリアフリー新法(高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律)が整備されるなど法制度が進み、公共施設や公共交通を中心にバリアフリー化が着実に進んでいる。しかし、健康者に占拠された電車内の優先席、障害者の方々のための駐車スペースに駐車された健康者の車など、使われ方が良くないために、せつかくのバリアフリーに対応した施設や設備が機能しないケースをいくらかも見ることができる。ハード面がいくらか改善されても、周囲の人の対応やサービスが良くなければせつかくのハードが活かされない。

この旅で最も大変だったのは、グアムでの移動や自分の英語が通じないことではなく、名古屋市郊外の自宅から中部国際空港まで公共交通機関を使つての移動であった。



桑名ワンデイウォーク

～五年間の取り組みを通じて～

石田 富男

「地元との交流を中心とするまちづくり系ウォーキング」というコンセプトのもと取り組んできた桑名ワンデイウォーク。節目となる五年を終えて、私なりのまとめをしてみたい。

歩いて暮らせる街づくりの取り組みをきっかけに始まった桑名ワンデイウォーク。最初は委託事業の一環として、三回目からは実行委員会の一員として参加した。我々コンサルタントとしての悩みは仕事として関わったまちづくりに、仕事が終わった後どう関わっていくかである。お金の切れ目が縁の切れ目となってしまうケースも多い。そんな中で、桑名は委託終了後もまちづくりに関わることができ、無理に時間を作っても参加してみたいと思わせる「まち」と「人」がいるという恵まれたケースだ。

もともと学生時代からウォーキングには関心をもっており、小豆島一周を五回完歩した経験もある。その時は全国から集まる人達と一緒に歩くことを純粋に楽しんだものだが、桑名での取り組みは、それをまちづくりと絡めたことに特徴があり、新たなまちづくりの展開につながる可能性を感じている。ラバダブ六号に第一回の取り組みを紹介するとともに、三つの特徴(市民参加の実行委員会の議論による企画内容の広がり、様々な市民団体との連携、ウォーキングをまちづくりに結びつける)を整理したが、さらに四つめの特徴として、市民の一体感の醸成をあげたい。

五年間に桑名市を取りまく状況も大きく変化した。一番の変化は市町村合併だろ。当初はニュータウンの人々と旧城下町の人々をいかに結びつけるかをテ

